

ない。「好む」でなければならぬから *nāskamyā*, 即ち *nis'kām* を語根とした梵語であるべきである。この梵語化は屢々古代の大乗梵語家によつて間違へられて梵語化されてきたが、この著者もまた、巴利の原意を見落してゐると思はれる。

とまれミッタル博士の該書は、我々に眞の梵語化といふものが如何なる操作を経なければならぬものであるかといふことを如實に教へた。又、それが巴利語の充分なる知識に照されてゐるといふ點で新しい光を投げた。經典史上にもたらした新資料としての意味は今更言ふまでもない。かかる原典の出版は今後一層佛教梵語佛典に於ける梵語そのものゝ再批判を要請するに違ひなご。

(Bespr. von G. H. Sasaki)

H. V. Guenther, *Philosophy and Psychology in the Abhidharma*,

Lucknow, 1957, XII+404 P.,

12×18cm

著者はオーストラリア人、現ラウナー大

學教授。佛教教義の哲學的研究に従ひ、密教についても造詣が深い。この書は廣義の阿毘達磨文獻の中に示された「哲學」(著者に従えばそれは “the perennial quest for meaning” とある)と「心理學」(著者に従えば “abstract understanding by which man is engaged in comprehending himself” とある)とを説明しようとした試みで、心・心所、靜慮、色法、道 (*mārga*) という四つの主要な論題を取り上げ、それらをパーリ上座部(主要な資料となつたのは *aṭṭhasālinī*)、説一切有部(主要な資料となつたのは俱舍論)・唯識派(主要な資料となつたのは阿毘達磨集論と莊嚴經論)のそれ々々の觀點から委細を詳しく論じてゐる。

梵語・パーリ語・チベット語に亙つて深い學殖のある著者であるけれども、この書は、假りに Stecherbatsky 教授の言葉を借りていえば、“philological” な研究とどうも響き合ひ “philosophical” なそれである。われわれは O. Rosenberg の *Die Probleme der Buddhistischen philosophie* や Stecherbatsky の *The Central conception of Buddhism* や C.

A. F. Rlys Davids の *Buddhist Psychology* などに加えて、そういう阿毘達磨佛教の哲學的研究の分野において、新たな興味深い勞作を惠まれたといつてよいと思ふ。

著者は阿毘達磨が自らの問題とするところのものは何かを論じている。「われわれは先ずわれわれ自身に生きてゐるかという問題を端的に捉え、その解答を見出さねばならない」「假説や演繹的論證によつての思辨の上で得られるようなものではなく、じかにつかまえられるもの、そしてそれをわが身の上に引きあてて考へ得るようなもの、に對して眼を開くこと以外に、(佛教の、従つて)阿毘達磨の、目的とするところは無い」(四頁)。

そのような現實たゞいさの「體驗」を問題とする第一義的な立場から、阿毘達磨を見徹してゆこうとする著者は、例をば、色法が決して “thing” を “matter” ではなくて「知覺の成り立ちの場においてその客觀の側を構成するもの」であると(二二二頁)、「佛教は、道 (*mārga*) は、至りていへば目標をまず先に考へて

それに向つてだんだん近づき、遂に最後のゴールに至つた時はじめてすべての價值がそこに生ずる、というようなものではなくて、道を求めて歩む一歩一歩——それは、「断え間のない闘い。Continuous string」であるが——それ自體が道の本質であり、道の價值であること(二七七頁)、などを強く説いている。

著者は佛教術語を英語でいゝあらゆるものに種々考慮を拂い、在來の容易な單語の當て嵌めを不充分として、獨得な言葉遣いをしてゐる。例へば心(cita)は著者によれば、'an attitude of a person—an emotional and intellectual pattern)であり、善心(Kusālistra)は、'healthy attitude'、不善(akusālistra)は、'unhealthy attitude'である(五頁以下)。色は上に述べたように、'an objective constituent in a perceptual situation'であるし(五蘊のみならず五根・無表色をも含む有部派で説く色法をこのようには言いきれまいが)、四大は、'great element'ではなく、'great elementary qualities'である(二二二、三頁)。心不相應行法は、'topics of dynamic import

not dependent on our attitude'、と説明される(二五〇頁)。このような用語には著者自身の阿毘達磨解釋がよく示されて、中には受けとり難く思われるようなものもないではないが、多くはわれわれに深い示唆を興えてくれる。

たゞ、著者は阿毘達磨の「哲學」を追うのに急で、それをその歴史的發展の上において眺めて行くという面は殆ど閑却されている。もとよりそれはこの書の主題では無かつたのであるが。

インド・ナーランダにて

(櫻部 建)

彙 報

◇ 眞 宗 學 會

○ 例 會

七月三日 午後三時 於研究室
一、現生不退の成立根據について

上杉助手
一、觀無量壽經の題號について
白井元成

○ 聞 思 會

十月九日 午後三時 於會議室
「教團について」の共同討論
出席者、名畑教授ほか二十名

◇ 佛 教 學 會

○ 特別講演會

六月二十四日 午後三時 於應接室
「ユダヤの神祕思想について」
講師 カリホルニヤ大學教授
ケブレン博士

通譯 佐々木現順教授

○ 哲學研究室と共催) 出席者五十名

稻葉正就助教授歸朝歡迎會
六月三十日 午後三時 於會議室
同助教授によるスライド「イタリー」

の映寫、および講演「イタリーの佛教學」があり、出席者は約七十名

○ 特別講演會

九月二十二日 午後三時 於會議室
「シナ佛教について」
講師サンチニケータン大學教授
リーベンタール博士

通譯 佐々木現順教授